

水野金一郎教授の定年ご退職によせて

松下 美 恵

新たな2000年を少しばかり華やいだ気持ちで迎えたのも束の間、水野金一郎教授が平成12年3月に定年ご退職されてから早や1年となります。水野先生をはじめお見かけしたのは、私が新米の助産婦として名古屋市立大学病院の産婦人科病棟で勤務し始めた頃だったと思います。先生は夜でも朝でも、緊急手術がある時や当直医が困惑している時には、いつでも駆けつけていらっしゃいました。昼間は外来もお忙しく務めておられ、いつお休みになっているのだろうと思ったことを覚えています。間も無くして、先生は医学部産婦人科助教授に就任されました。当時は、大学の助教授というとても近寄りたいたい存在でありましたが、水野先生はそのお見かけどおり真面目一徹な一方で、温厚で優しく面倒見のよいお人柄でしたので、患者さんをはじめ、誰からも慕われていました。

こうして振り返ってみますと、私自身はこの任に相応しいのかどうか大変僣越と思いますが、今日までの先生より頂いたご指導に感謝の意を込めて、先生のご略歴やこれまでのご研究の概要などを、ご紹介したいと思えます。

先生は昭和34年3月に名古屋市立大学医学部をご卒業され、名古屋市立大学医学部産婦人科教室研究員、名鉄病院産婦人科で医師として、臨床に、研究に多くの研鑽を積まれ、昭和41年10月には本学医学部産婦人科の助手に就任されました。そして同講師を経て、昭和48年6月に本学医学部産婦人科助教授に就任されました。研究、教育、診療と多忙な中で、先生の指導のもとに巣立っていかれた先生方も多くいらっしゃいます。昭和63年4月に名古屋市立大学看護学校と名古屋市立看護専門学校の統廃合に伴い、名古屋市立大学に看護短期大学部が併設され、先生は同看護短期大学部教授並びに初代の部長としてご着任されました。平成3年4月には専攻科助産学専攻の開設にも力をそそがれ、教育そして同看護短期大学部の礎を築くことに専心されました。さらに平成8年から平成10年3月までの2年間、再度、同看護短期大学部長に就任されましたが、この期間は本学看護学部

立準備期であり、その教員選考専門部会長として非常に困難を極めた人材の確保に献身的にご尽力されました。そして平成11年4月看護学部開設時に教授に就任されました。先生のこれまでの、本学医学部、看護短期大学部および看護学部の教育、研究、また大学運営における功績に対して、看護学部として初めての本学名誉教授の称号を受けられたことは記憶に新しいところと存じます。

学術活動としては、日本産科婦人科学会、日本不妊学会、日本母性衛生学会、日本臨床免疫学会、日本癌治療学会、日本新生児学会など多くの学会に所属され、学会発表および原著論文を多数発表しておられます。また囑望されて、日本産科婦人科学会評議員、日本不妊学会評議員、愛知県助産婦教育協議会会長、日本母性衛生学会理事、全国助産婦教育協議会理事を勤められ、このうちのいくつかは現在も役員をされています。また、平成8年5月から平成11年5月までの4年間、愛知県母性衛生学会会長として大役を果たされました。さらに現在も、日本死の臨床研究会世話人としてご活躍されるとともに、平成8年1月からは、あいちホスピス研究会副会長を務められるなど、先生はわが国における産科婦人科学全般の発展と啓蒙、患者と家族のこころのケアに多大な貢献をされてこられました。

水野先生が医学部で研究・教育・診療に従事された期間は、主に、生殖内分泌領域において活躍されていました。昭和59年に当時の教授（八神喜昭名誉教授）が産婦人科マイクロサージャリー学会を開催されたときには、水野先生のプランでその頃新しく血管吻合術に応用されていたYAGレーザーを使って、簡単に卵管吻合術ができないかとの課題にとりくまれ、東京農工大学畜繁殖学の獣医のもとまで出向かれたそうです。そこで白色家兎による基礎的な実験、光学顕微鏡を用いての組織学的検討、そして走査電子顕微鏡を用いての形態学的検討などに情熱的に取り組まれ、ついには卵管吻合術をおこなった山羊から元気な産仔を得ることに成功されました。当時は初めて体外受精児が誕生したばかりの時代であり、マイクロサージャリーによる次世代の不妊症治療法のご

水野金一郎教授の定年ご退職によせて

研究は、体外受精・不妊治療時代到来において大きな一歩であったことと思います。先生が基礎を築かれ、後進の指導にあられた生殖内分泌の研究は、現在では輝かしい成果を挙げつつあり、多くの難治性不妊症の患者さんに福音をもたらしていると伺いました。

看護短期大学部にご着任されてからは、それまで温めてこられた「生命倫理」「医の倫理」など倫理の方面に学問的造詣を深められ、もはや医学的には治療が不可能となった人たちへの終末期ケアを目的とした病院の視察や調査研究を意欲的にされました。平成5年初秋には、現在のホスピスの原型でもあり、最初の近代的ホスピスといわれているセント・クリストファーホスピス（ロンドン）に、平成7年初春にはセークリッドハートホスピス（シドニー）など、世界のターミナルケア施設へ訪れていらっしゃいます。そしてそれらの見聞については学内でも報告会を開かれ、また調査研究の業績は、看護短期大学部紀要に数多く掲載されました。さらに先生は、平成7年10月、「生と死を考える会」を主宰され、数回にわたり講演もされています。これは患者や家族の方々が、お互いに話し合い苦しみや悩みを分かち合うとともに、「生と死」について学び考えることで自己を向上させるための集いとして、はじめられました。最近では「悲しみの分かち合いの会」として位置付けられ、平成12年3月までに30人を超える方々が出席され、毎月の例会には平均10人前後の方が集まって来られます。水野先生は、この会に毎回参加し、自分の悲しみ、怒り、後悔に打ちひしがれ、生きる気力さえなくした参加者の訴えやお話を耳を傾けておられます。参加される方々は、異口同音に「この会へ出かけて本当によかった」「毎月この会へ来ることで心が安らぎます」と話されるそうです。そしてこのようなご活動とご経験が買われて、平成11年4月、愛知県で2か所の緩和ケア病棟が設立されることとなった折に、その1つである愛知国際病院の設立準備に関わられることになったそうです。

教育においても、先生の倫理的見地からのお考えが反映され、日本看護医療学会ではシンポジストとして「看護婦の仕事は、患者さんを医師から守ることです」と看護の視点から話されました。講義では「大切な人を亡くし、悲しんでおられる人に何ができるのか考えなさい」と問いかけられて、ドキッとした体験を語ってくれた看護短大生もいました。学生の課外活動に対しても、先生は積極的に支援をされていました。ご自身も学生時代、水泳部に所属されていたこともあり、部員の歓送迎会には先輩として参加され、名古屋市立大学水泳部誌に数回にわたり激励の文章を寄せられていました。そしてもっとも大きな課外活動行事である大学祭でも、医学際の冊子に何度も特別寄稿されています。その、「尊厳ある死を迎えるには」「死生学とは」「コミュニケーションと医療」など数ある中でも「一つの口と二つの耳」と題された文書にある「医療は聞くことから始まり、聞くことで終わる。説明一で聞くこと二である」は、先生の、医学生、看護学生に対する強いご教示を感じます。平成11年4月から始まった看護学部の基礎ゼミの講義では、学生が自ら終末期のケア施設の見学を望み、一緒にターミナルケア施設にいかれたそうです。20歳前の伸び盛りの看護学部生にとって、とても大きなものが得られたことでしょう。

先日、大学へおいでになり、久しぶりにお会いしましたが、温顔をたたえ、また大変お元気そうで、とても定年退職後の方のお年には見えませんでした。いままでお忙しかった分、少しはゆっくりとなさって頂きたいものですが、先生のご経歴とお人柄では囲りがほっておかないようで「全然休みがない」「水泳もご無沙汰」といいつつも楽しそうなお姿が、水野先生らしくとても印象的でした。

今後も健康に留意され、益々のご活躍を祈念しております。